

行の宗教から出会いの宗教へ

本山一博

はじめに

2004 年の 11 月の公開シンポジウム「現代における宗教者の育成」は、その知らせを読んだときに開催趣旨からして大いに期待の持てる内容だと思った。企画した弓山先生の問題意識も鋭いと思った。宗教界にとって本質的な問題であるのでたくさんの聴衆が集まるだろうと思った。参加してみると、聴衆の入りは盛況とはいえないものだった。宗教界の問題意識の低さというか、内向きな姿勢というか、そのようなものの表れと思われ、がっかりしたことを覚えている。すばらしいテーマを出した弓山先生が気の毒だと思った。

若干本筋から離れるが、私は真の宗教対話はアカデミーと宗教者の協力関係から生まれると思っている。宗教者だけでは難しいと思う。宗教者は学者のことを「所詮学者だから」と思い、学者は宗教者のことを「もの知らず」だと思っている。このような状況は不幸だと思う。この状況が今回のシンポの集まりの悪さに現れているのではないか。アカデミーと宗教者のコラボレーションを国際宗教研究所に大いに期待している私としては、この重大なテーマのシンポにもっと宗教者は注目して勉強しに来てほしかった。

1 求道者型の限界

自己完結的な求道者型

さて、シンポの内容そのものは大変によかった。いろいろと考えさせられた。いろいろな話題が出たが、その中で特に私が興味を持ったのは戒能先生の発表した C コース（神学校を経ない受験者、他教派からの転入者）についてと、

塩入先生の発表した公募制の僧侶養成についてである。とかく閉鎖的になりがちな宗教界にとって非常に有益な試みであると思われるが、発表によると必ずしも上手く機能してないらしい。戒能先生によるとCコースの人は生の社会経験があるが、それが牧師になってそのまま生かされるということはあまりないらしい。その人々はあまり牧師としては上手くいかないかと自省することが多いらしい。塩入先生によると公募制で入ってくる人は自分自身の求道のため的人が多く、このような求道者型の人寺院経営で上手くいかないことが多いという。私はこの問題を特に取り上げて、何が問題であるのかを考えてみたい。戒能先生のCコースの人も合わせて求道者型としてくると、問題は、求道者型はなぜ宗教者あるいは教団人として機能しないのかということになる。結論から言えば求道者型の信仰は自己完結的なものであることが多く、それだけでは信徒という他者との関わりでこそ機能する宗教者の役割を果たせないことが多いのではなかろうか、ということである。

私自身がフロアから求道者型の問題点について質問したとき塩入先生からは「求道者型の人モチベーションが高いが、オタクというか、寺院経営の世俗的な部分にいやらしさを覚え、性急な改革をしようとして周りと摩擦を起こす。そして途中で見限って出て行ってしまう」というようなお答えがあった。教団内部にいと確かに教団とは世俗的な部分が多く、私自身も「こんなことが信仰とどう関係があるのよ」と、げんなりすることが多い。しかし、信徒の人生はある意味で世俗そのものであり、それから超然としていては宗教者としての役割は果たせない。フロアには学習院大学の院生の方がいらして「信者の中にもモチベーションが高く、よく勉強している人がある。それらの人と宗教者の違いは何であるのか。宗教者の資質とは何か」という趣旨の質問をされた。私は宗教者は一信徒であるべきだと考えているので、宗教者の立場が信徒のそれより高いとは思っていないが、やはりそこには役割の違いから来るスタンスの違いがある。それを安井先生と戒能先生が的確にお答えになっていた。安井先生は「人を救う心を持つということが宗教者の資質であり、それは単なる相互扶助を突き抜けたところにある」とおっしゃり、戒能先生は「困っている人に対して身をかがめて身を添えることが最大の資質であり、スピリチュアリティなどより大切だ」とおっしゃった。宗教者とは他者と出会い、他者と関わる「仕事」なのである。

スピリチュアリティの継承とは

一方で戒能先生のご発言に多少の突っ込みも入れたくなった。人が宗教に入ってくる理由はいろいろあり、中でも重要なものは自分自身ではどうにもできない問題の解決というのものがあ、それはつまりとて救いを求めているということである。しかし、文字通りスピリチュアリティを求めて宗教に入る人も少なからずいるし、それは以前より増える傾向にあるのではないか。また、救いを求める人も宗教者にスピリチュアリティを求めることが多い。これは戒能先生自身がおっしゃったことだが、日本基督教団では500人以上の信徒を抱えるカリスマ度の高い教会がいくつかあるという。そのような教会はあまり教団に顔を出さないし、問題も出る。しかし、お金はきちんと出してくれる。また、そのような教会は30年周期くらいで没落することが多い。そのことを知っているそれらの教会のカリスマ的指導者たちは将来のことを考えて日本基督教団にとどまっている。以上のようなことを戒能先生は求道者型の問題点に関する私の質問のときのお答えとしておっしゃった。先生としてはそれらのカリスマ的指導者たちが場合によっては「教祖」になることの危険性を指摘されたのだと思うが、一方では、信徒になる人はそのような「教祖」、つまり霊性を感じさせる人を求めているのだとも言える。そのことはそのような教会が単に人が多いのみならず資金的にも余裕があることから伺える。また、先生のご指摘は教祖性、つまりその人がまとっているスピリチュアリティは継承しがたいということを示していると思う。だからこそそのような教会は30年周期で没落するのだろう。

また、塩入先生は求道者型が性急な改革をしようとする問題点を指摘されたが、そのような求道者は結局独善的であり自己完結的であるのだろう。そこで次のような問題が意識に上る。スピリチュアリティを如何に継承するか、そしてスピリチュアリティが自己完結的にならずに他者との関わりを持つためにはどうすればよいのか。

スピリチュアリティと瞑想

そもそもスピリチュアリティとは何かという問題があるが、ここではそれはあまり触れずに話を進めよう。ある種のスピリチュアリティあるいは霊性を生まれつき具えている人がある。日本ではそれは血によって継承されるというイ